５　次の文章は、明治期に著された中村秋香『秋香歌かたり』の一節である。これを読んで後の問い（問１～問５）に答えよ。なお、本文は一部改変したところがある。

　　　　　　　　　　〈大阪大〉二〇二三年度出題

　桃青が、

　　馬に寝て残夢月遠し茶の

の句は、が早行の詩の「馬上続残夢」といふ句をふみていへるなるが、「月遠し茶の烟」とうけたるにて、残月早行の景色も、馬の背にまどろみつつ、ゆられゆられ行くさまも、まのあたり見るが如く、本詩の「不レ知朝日昇」といへるより、遙かに味あるを覚ゆ。田与清が『俳諧歌論』に、これらの句を評して、漢文を邦語にてよむが如く、（１）なでふたはごとぞやとれるは、よくも思はぬ論といふべし。

　またが、

　　さへすごきに夏の炭俵

といへるは、『抄』に、

　　火おこさぬ夏の炭櫃のここちして人もめずすさまじの身や

とある歌より思ひよせたるなるべしと、翁がいはれしはいかが。こは『枕草子』の「すさまじきもの」に「こさぬ、炭櫃」とあるをふめるにて、『無名抄』の歌と（２）よるところ同じとこそいふべけれ。

　遠江なる嵐牛は、俳句にてはその頃知られたる人なりしが、ある時、

　　ふ前に三つ四つ蛍かな

といふを得て、かかる情は歌にてはいひ得がたかるべしと思ひ、依平に示しけるに、依平みて、「余は俳諧のことをしらねば、とかくの評を加ふべきならず。但し歌にては  
（３）『鍋洗ふ前を』といはざるべからず。『を』といへば即ち、鍋洗ふ前を三つ四つ蛍が飛びかふさま、言外にしらるべし。『前に』にては鍋を洗ふ前の草むらなどに居るさまにて、飛びかふさまとは聞こえぬなり」とありければ、嵐牛深く感じ、これより常に依平が教へを受けて俳句も大いにすすめり、と氏語られき。

　また、人口にせる、

　　よの中は三日見ぬまに桜かな

の句、或いは「三日見ぬまの」とも伝ふ。「（４）『三日見ぬまに』といふ時は、『三日見ぬま』の句は、『よの中』といふにかかり、三日の間に局面の一変することを『桜かな』といひたることとなり、『桜かな』は花盛りをいへるが如く聞え、また『三日見ぬまの』といふ時は『三日見ぬま』の句は桜にかかりて、『三日見ぬうち変じたる桜』といふこととなりて、『桜かな』は落花をいへるが如く聞ゆ」と、夫人いはれき。（５）共に面白きはなしなり。

（注１）松尾桃青　桃青は芭蕉の別号。

（注２）眉山が早行の詩　宋・蘇軾の「太白山下早行至横渠鎮書崇寿院壁」という漢詩。

（注３）小山田与清が『俳諧歌論』　小山田与清は江戸時代後期の国学者。『俳諧歌論』は、『古今和歌集』に見える「俳諧歌」から始めて、俳諧について論じる書。

（注４）其角　俳人。芭蕉の門人の一人。

（注５）無名抄　鴨長明による、和歌についての書。

（注６）すさめず　心引かれることがない。

（注７）芳樹翁がいはれし　芳樹翁は江戸時代後期の歌人・国学者、近藤芳樹。引用されているこの部分は、その著書『寄居歌談』巻三に見える。

（注８）火おこさぬ火桶、炭櫃　『枕草子春曙抄』などによる本文。「火おこさぬ炭櫃」などとする本もある。

（注９）柿園嵐牛　江戸時代後期の俳人。

（注10）鍋洗ふ前に三つ四つ蛍かな　本文では嵐牛の句とするが、作者未詳の句として「米洗ふ前に蛍の二つ三つ」という形でも知られる。

（注11）石川依平　江戸時代後期の歌人。

（注12）春畊氏　未詳。

（注13）穂積夫人　明治期の歌人、穂積歌子。

問１　傍線部（１）「なでふたはごとぞや」を現代語訳せよ。

問２　傍線部（２）「よるところ同じ」について、何と何とが、どのように同じであるというのか、説明せよ。

◎問３　傍線部（３）について、なぜ「『鍋洗ふ前を』といはざるべからず」と言うのか。「前を」とした場合と、「前に」とした場合とで、「言外」に感じられるものが、どのように違うのかを示しながら説明せよ。

問４　傍線部（４）について、「『よの中』といふにかかり」とある「かかり」が、文法的に言う「かかる」（修飾する）ではないことに注意して、どのようなことを言っているのか、説明せよ。

問５　傍線部（５）「共に面白き」と言っているのは、どのようなことと、どのようなことが、どのような共通点をもつ話として「面白き」と言っているのか、説明せよ。

※〔改題〕問いの表記を一部改めている。

【解答と採点基準】

問１　ＡなんというＢでたらめな句だろうか

Ａ＝４

Ｂ＝６〔「句」がなくても可。文末は「～ことよ」も可。「ぞや」の訳の「～だろうか」「～ことよ」などがなければ減点２。〕

問２　Ａ其角の「炭櫃」の句と『無名抄』の「炭櫃」の歌は、Ｂともに『枕草子』の「すさまじきもの」の「火おこさぬ火桶、炭櫃」を踏まえて、Ｃ季節外れで使用されない夏の炭櫃へのＤ興ざめな気持ちを詠んでいる点で同じである。

Ａ・Ｂがなければ全体０。

Ａ＝３／Ｂ＝３／Ｃ＝２／Ｄ＝２

問３　Ａ「前を」の場合は鍋を洗う人の前を三、四匹の蛍が飛びかう様子が想起されるのに対し、Ｂ「前に」の場合は眼前の草むらなどに蛍がいる様子が想起されるが、Ｃ蛍の飛びかう動的な様子を想像させるには、「前を」のほうがふさわしいから。

Ａ＝４〔「前を」「蛍が飛びかう様子」という内容がなければ不可。〕

Ｂ＝４〔「前に」「蛍がいる様子」という内容がなければ不可。〕

Ｃ＝２〔「動的」と同様の表現も可。〕

問４　「三日見ぬまの」が「桜」と関係するのに対し、Ａ「三日見ぬまに」の場合は、「三日見ぬま」の句が「よの中」と関係する表現となり、Ｂ三日見ないうちに桜が花盛りになるように、Ｃよの中は三日見ない間にすっかり変化するものだということを述べている。

Ａ＝６〔「『三日見ぬま』の句は『よの中』と関係する」という内容がなければ不可。〕

Ｂ＝２〔「桜が花盛りになる」という内容がなければ不可。〕

Ｃ＝２〔「よの中は変化する」という内容がなければ不可。〕

問５　Ａ「鍋洗ふ」の句の「前に」と「前を」という表現の違いの話と、Ｂ「よの中は」の句の「見ぬまに」と「見ぬまの」という表現の違いの話とが、Ｃともに助詞が一字異なるだけでＤ読み手が句から思い浮かべる情景に差異が生じるという共通点をもつ点で面白いと述べている。

Ｃ・Ｄがなければ全体０。

Ａ＝２／Ｂ＝２

Ｃ＝３〔「助詞が一字異なる」という指摘がなければ不可。〕

Ｄ＝３〔「情景に差異が生じる」と同様の内容であれば可。〕

【現代語訳】

　松尾桃青の、

　馬に寝て…（馬上でまどろんで、〈はっと目覚めると心には先ほどの〉夢が残っている。〈空には〉月が遠くに見える。茶を煮る煙〈も立ちのぼっている〉。）

の句は、眉山の早行（＝早朝に旅立つこと）の詩の「馬上続残夢」という句を踏まえて詠んだのであるが、（句の後半で）「月遠し茶の烟」とうけたことによって、月が残っている早朝に旅立つ景色も、馬の背でまどろみながら、ゆられゆられ行く様子も、まのあたりに見るかのようで、元の詩が（「馬上続残夢」の次の句で）「朝日が昇ることも気づかない」といったのより、遙かに味があると思われる。小山田与清の『俳諧歌論』で、これらの句を批評して、漢文を日本語で詠むかのようで、問１なんというでたらめ（な句）だろうかと非難したのは、よく考えていない論といえるだろう。

　また其角が、

　炭櫃さへ…（〈夏は〉炭櫃でさえも無風流なのだから、夏の炭俵〈はまして無風流だ〉。）

と詠んだのは、『無名抄』に、

　火をおこさぬ…（火をおこさない夏の炭櫃のような気持ちがして、誰も心引かれることがない興ざめな我が身であるよ。）

とある歌から着想を得たのだろうと、芳樹翁がおっしゃったのはどうだろうか。これは『枕草子』の「すさまじきもの」（という章段）に「火おこさぬ火桶、炭櫃」とあるのを踏まえたのであって、『無名抄』の歌と依拠するところが同じというほうが適切だろう。

　遠江にいる柿園嵐牛は、俳句ではその当時名の通っていた人であったが、ある時、

　　鍋洗ふ…（鍋を洗う前に三、四匹の蛍〈がいるの〉だなあ。）

という（句）を思いついて、このような詩情は歌では言い表しがたいに違いないと思い、石川依平に示したところ、依平は見て、「私は俳諧のことを知らないので、あれこれと評を加えることはできない。ただし歌としては『鍋洗ふ前を』といわないのは適当でないだろう。『を』といえばすぐに、鍋を洗う前を三、四匹の蛍が飛びかう様子が、言葉で言い表さないこととして理解されるだろう。『前に』では鍋を洗う前の草むらなどに（蛍が）いる様子であって、飛びかう様子とは思われないのだ」と（指摘が）あったので、嵐牛は深く感動し、これ以降常に依平の教えを受けて俳句（の技量）も大いに進歩した、と春畊氏がお話しになった。

　また、多くの人々が口にし、広く知られている、

　　よの中は…（世の中は三日見ない間に桜〈の花盛りになるもの〉だなあ。）

の句は、あるいは「三日見ぬまの」とも伝わる。「『三日見ぬまに』という場合は、『三日見ぬま』の句は、『よの中』（という言葉）に関係し、三日の間に局面が一変することを『桜かな』といったこととなり、『桜かな』は花盛りを表現したかのように思われ、一方で『三日見ぬまの』という場合は『三日見ぬま』の句は桜（という言葉）に関係して、『三日見ない間に変化した桜』ということになって、『桜かな』は花が散り落ちることをいったように思われる」と、穂積夫人がおっしゃった。どちらも面白い話である。